落ちる

向坂達矢

概要

「特権」について聞かされた。病弱だったとか、マイノリティーだとか、いじめ被害者だったことが「特権」であると彼（劇作家だった）はビール片手に私に語った。

苦しみ、痛みが劇作の燃料になるのなら、「社会」は劇作家の格好の狩場である。

劇団を解散し植木屋に就職した。罵倒される職人、末期ガンに侵されるも老いた母を養うために殴られながら働く老職人、彼らと仲良くなってしまった私は状況に耐えられず離職し、学童保育の職員となる。問題児に発達障害のレッテルを張る先輩。「発達障害は病気です」。そういえば、老職人は怒鳴られていた「お前病気じゃねえのか？病院行けよ」って。そうだよ、癌なんだから。

万有引力は引き合う力だ。劇作家は特権を欲望し、苦悩を引きつける。苦悩は苦悩自身を特権と見なす劇作家へ向かう。劇作家はそうやって「落ちる」。劇中の劇作家は私の人生の影法師だ。影法師な彼はルジェーヴィッチに描かれたそのままに見える。

あらすじ

巨大な犬の金玉が浮かぶ世界。架空の世界。

落ち続けている「男」は劇作家だ。

落ち続けていく「男」の傍でいくつもの上演がされる。劇中劇ではない。しかし、その上演は「男」によって書かれた戯曲であるらしい。

「男」を通り過ぎる上演には「劇作家」「弟子」という人物が登場するが彼らは「男」が戯曲に書き込んだ「男」の「私」である。

「男」は一匹の犬に出会い、犬の導きで上演に巻き込まれる。犬と「男」は落ち続け、痛みが集まる底へたどり着く。痛みは具体的な存在である。

空に浮かぶ金玉袋は「男」を導く犬の金玉でもある。「男」と犬は空の金玉に向かい「落ちる」ことを決める。底からの引力を切り離し、空の金玉との引力と引き合うのだ。金玉に、つまり「現実」の犬に向かって「落ちる」。

上演に参加していた「女」は終幕のセリフを喋るが、これは「男」に書かれたものでなく、俳優の「女」が自発的に発するものだ。この上演に「男」はもういない。

落ちる

おちながらわれわれは庭を作り
おちながら子供をそだて
おちながら古典をよみ
おちながら形容詞を消し

――――――ルジェーヴィッチ「おちる」

「男」「劇作家」「弟子」は劇作家を自認する者たちが演じるとよいかもしれない（少なくともそのように想定している）。幾つかの役を一人の俳優が兼ねるなどの工夫もよいだろう。劇作家たちと幾人かの俳優たちに。

それから犬に。

「男」が落ちる。
落ちている途中である。
落下中である。

男　助けてくれ。落ちているんだ。俺は

俳優が現れて。

俳優　4月3日、午前4時14分、夜明け前。空を見上げると、巨大な犬の金玉袋。江戸川の土手から見える犬の大ふぐりは左右に大きく揺れている。不安だ。スカイツリーに刺さるんじゃないか。刺さらないんじゃないか。いや、刺さるんじゃないか。ギリギリのところで揺れる巨大な犬の金玉袋

俳優去る。

落ちてゆく。

「金たまがちぢみあがる」

男、気の遠くなるほどの時間を落ち続けているとみえ、もはや悲鳴もあげていない。

劇作家が現れて男に話しかける。

劇作家は落ちていない。

落ちるのは件の男だけだ。

男　助けて。落ちているんだ。届かないのか俺の言葉は。おい！ おい！

劇作家　本日はお集まりいただき、ありがとうございます。まず、謝罪させていただきます。私の不徳の致すところで御座います。本当に申し訳ありませんでした。私の話をまず、させていただきたいのですが。申し訳ありません。私が小学生の頃、近所に「オカダ」という駄菓子屋がありました。近所というのではニュアンスが伝わらないかと思います。申し訳ありません。「領域」といえば、お分かりになりますでしょうか？ いえ、決して愚弄しておるのではありません。誠実に、誠実に徹しております。小学生というのは、少なくとも私の場合はということになりますが、明らかに「領域」というような地域の区分けがございまして、「オカダ」は私の暮らしの領域の内側に存在する唯一の駄菓子屋で

あったと記憶しております。少し行ったところに「ヌマタ」もございましたように記憶していますが、「ヌマタ」は伊達巻屋のジュンちゃんたちの領域でありまして、私の実家からはどちらも大して距離は変わらないのですが、明らかに私は「オカダ」の住人であったと思います。「領域」というのは、もしくは駄菓子屋を中心に展開されていたのかもしれないとすら、思えてきます。「オカダ」には駄菓子屋あるあるというところのバアさんがおりまして、おそらく店主であると思われます。この「オカダ」のバアさんは、私の母の幼少期からバアさんであったと言い伝えられていまして、駄菓子屋のバアさんいつまでたってもバアさん伝説というのは全国各地から聞こえる声であると、聞き及んでおります。「オカダ」のバアさんは、「ヌマタ」のバアさんとは違い、恐ろしいバアさんとして私ども小学生を怯えさせていました。「ヌマタ」のバアさんは品があって、美容院などに通っている感じの、マダム！ そうマダムといった様子のバアさんでして、笑顔が絶えません。一方、「オカダ」のバアさんはその半眼で私ども小学生顧客を睨みつけ、少ない小遣いからやりくりせねばならぬ身ですから、当然悩みに悩み、ベビースターなのか、うまい棒なのか、蒲焼きさん太郎なのかと悶え苦しむ我々に「まだなのか！」「早くしろ」とまあ、圧ですね、圧の言葉を投げつけるのです。結局、そんなにいらない駄菓子を買うことになってしまう訳で、満足して買い物をしたという経験は記憶にございません。申し訳ありません。それなら、「ヌマタ」に行けばいいじゃない？ そうじゃない？ というご意見も聞き及んでおりますが、確かに「ヌマタ」は薄暗い「オカダ」と違って蛍光灯の光、バアさんのマダム感、ケーキと紅茶でも出てくるんじゃねえかと思わせる気品がございました。しかし、そこは領域問題でございます。そわそわしちゃうんですね。「あら、どこの子？」とか聞かれちゃったりしますと、緊張で声が出ません。ケーキどころか馬糞を投げつけてきそうな「オカダ」のバアさんは「ああ、そこのマキの垣根のうちの子だね」と私たちの出自の首根っこをがっつり抑えておるわけです。安心というのとは違いますね。特別な理由がない限り「オカダ」に行くものであるという呪いが私たちには刻まれていたとしか説明のしようがありません。蟻地獄に落ちたアリに、「なんで避けて通らなかった？」と聞いたって「そ

こに行くものだと思ってた」と答えるでしょう。それと同じです。DNAに刻まれし宿命であったと思います。当時私にはタカちゃんという友人がおりまして、ご両親が関西出身ということで、多少関西の方言がありました。「なんでやねん」「どないやねん」「なんぼでっか」などの言葉はついぞ聞いたことはございません。ご期待に応えることができず申し訳ありません。イントネーションに多少、そういったソース味というのでしょうか、関西の磯の香りが漂っておりました。タカちゃんは少年野球に入っておりまして、私はそういった屋外でボールを使って泥にまみれることを蛇蝎のごとく嫌っておりましたので、もちろんそういったやがてプロ選手になるようなスポーツ自体を蛇蝎のごとく嫌っておりました。偏見持ちの嫌な小僧だったと、そう申し上げることだけが私がお見せできる唯一の誠実さでございます。申し訳ありません。低学年の頃は毎日一緒に土手沿いの道を下校したものでした。橋を渡って、左にゆくと小川公園で、右にゆくと「オカダ」。「オカダ」の前を通って、小川中学を左にゆきますと私の家がございます。タカちゃんの家は、我が家からもう15分ほど歩いた先にありました。ちょっとわかりにくいかと思うので図で説明します。（ホワイトボードなどに書く）ここが小川小学校で、ここが通学路の土手ですね。こっちに小川公園がありまして、「オカダ」はここです。「ヌマタ」はここになります。ちなみに、小川小学校の横に国道ですね。この国道を挟んで、こっち側が私たちの住む農民の居住区。反対側が漁民の居住区です。漁民の居住区の子供達は私どもよりも言葉が汚いように思われまして、また農民に比べて粗野で、暴力的な印象があります。また、農民の居住区をもっと川ぞいにゆくと新築戸建の民の居住区で、彼らは漁民、農民に比べ、おしゃれ、髪がサラサラ、長ズボンでした。漁民、農民は半ズボンに青っ洟がデフォルトで、出てくるおやつも魚、果物、野菜、おせんべい、和のものですね。一方、新築戸建のおやつはケーキ、クッキー、オレンジジュースです。麦茶じゃないんですよ！ 高学年になると、タカちゃんも少年野球が忙しく、またクラスも引き離されてしまって、一緒に帰ることも少なくなりました。私はだいたい一人で土手沿いを帰るわけですね。あれは、初夏だったと思います。私がいつものようにひとりで「オカダ」の前を通り過ぎた時です。後ろ

男

の方から騒ぐ声が聞こえます。振り向くと、新築戸建の民の子が数人で歩いている。彼らは敵方の服を審判にわからないように引っ張ったり、審判にわからないように足を蹴ったりする「柔道やれよ。いっそ」と言わずにはいられないサッカーというスポーツのクラブに入っているクソどもです。最も当の柔道側でも蹴るのは違うだろとおっしゃっていますが。私はどっちかというと野球の方がサッカーより健全なイメージを持っていまして、茶髪、ロン毛、ウルフカットに対して坊主一択の野球の方が仏教的と申しますか、和のテイストを感じ取っていました。今もそうです。プロになると、慣れない茶髪に変な金のネックレスをしだすあの洗練されなさも好感度高めでございますでしょ？さて、新築戸建てのサッカー少年たちがその時蹴っていたのは白黒のパンダを模したボールではなく、真っ黒のランドセル。背負っているのは親友のタカちゃん。彼奴等はタカちゃんのランドセルを蹴り上げながら楽しそうに下校に勤しんでいました。私は石像のようにただ突っ立ったまま、楽しそうにタカちゃんの背負ったランドセルを蹴り上げる少年を、少年たちを見つめている。ふと映画「スタンドバイミー」を思い出していました。視神経からはランドセルを蹴る少年たち、脳神経からは線路を歩く「スタンドバイミー」の同時上映です。気取ったフランス映画を観て混乱する場違いな観客が私。橋まで来るとタカちゃんはその場に、アスファルトに両膝をつかされ、天を仰ぐ。その背中のランドセルを一人ずつ蹴り上げながらサッカー少年たちはケタケタと笑いながら真っ白な新築の一戸建てに帰ってゆきました。タカちゃんは雨にこそ打たれてはいませんでしたが、ここで映画「ショーシャンクの空に」。両手で顔を覆うタカちゃん。客席を立てないでいる私。その時、「オカダ」から走り出す漆黒の影。オカダのバアさん！たぶん走っている！チョコチョコとタカちゃんの傍にすっくと立つオカダのバアさんは「全部観てたよ。これ食べな」。オカダのバアさんの握った皺くちゃの手からタカちゃんに差し出されたのはラーメンババア、であったのです

助けてくれ。落ちているんだ

劇作家悲しそうに首を横にふる。

劇作家　私どうしたと思います？　逃げました。それから逃げっぱなしの人生だったな。立ち向かったということがないんだ。今ならわかるんです。「見てねえで助けろ」とか、「バアさんがラーメンババア差し出したら意味が出るだろ」とか。そういうことならわかるんです。私はその後、町を出て大学に進学し、しばらく後にオカダは潰れたと母から聞きました。オカダのバアさんのその後を、私は知らない。近所のバアさんというのは妖怪みたいなものです。でもわからなきゃいけないことは何にもわからないんだ。すみませんね

劇作家は懐からマイクを取り出す。

劇作家　私は劇作家。ご存知ですか？　劇作家を。劇作家って無職なんですよ（マイク）

客席からヒステリックな笑い声が上がる。

男たちの笑い声が。

劇作家は舌打ち。

男　助けて。落ちているんだ。そうだ、俺も劇作家だ。戯曲を書いているところだった。おい、助けてくれよ

劇作家　あ、雨だ。明日は晴れるといいですね

男　おい！　落ちているんだよ！

劇作家うつむきながら去る。

雨が降っている。

男は落ちる。

雨は降る。

落ちてはいない。

男たちが二人別々に現れて、雨に気づく。

古い駄菓子屋の軒先で見知らぬ男同士の雨宿りが始まる。

俳優　泣いているようじゃああありませんか？

俳優２　止みませんね

俳優　あのほら、雨がね

俳優２　私、ほら、あの、子どもの頃に母がいたんですね

俳優　ええ。私にもいました。母

俳優２　ああ。そういうことってありますよね

俳優　そういうことですか？

俳優２　思っていたよりも共通点があるみたいなことです（マウントである）

俳優　そうですね。あ、父もいました。私には父が、いました。います。父が

俳優２　父の話は、ちょっと（不幸の影がある）

俳優　あ、すみません

俳優２　（切り替えて、唐突に）マザコンっていうんですか？ 私

俳優　私はそんな風には思いませんよ。思うもんですか（励ましているのだろう）

俳優２　（卑屈な笑みを浮かべ）そうだと。そのようだとしても。貴方がそうだとそのように仰っても、私はだから、ちょっと。父はちょっと。マザコンなんでしょうね。父はちょっと、ですから。母はしかし、ちょっとじゃない。そう、例えばたくさん。母がたくさん。もうたくさんなんです母は。それはマザコンですでしょう？ 母がたくさんなんですから。父はちょっとなのに。かわいそうな父。ちょっとなんですから父は。でも母。母。母がね。母って言っても私の母のことなんですけれど、母が雨の日は決まって詩を詠むんです

俳優　（たいそう興味があるのだろう）韻はどうでした？ 踏まれてましたか？

俳優２　（少し戸惑いながら）ええ、決まって韻を踏んでいたと思います。むしろ韻を踏むために詩を詠んでいた節もあったくらいです。踏みたくて、踏みたくて、韻。どうしようもないことってありますでしょ？ 子

ども時分じゃあそういうことってわからない

俳優　私はどうしようもない子どもでしたよ

雨が降っている。

俳優２　母の韻思い出せないな

俳優　しとしとぴっちゃんしとぴっちゃん

俳優２　母のとは趣が違うようですね

俳優　そういうものでしょう。詩というのは。人が十人いれば詩も十ある。そのように生きなさい。貴方も。そうあるべきです。きっとお母様も、ここでのお母様は貴方のお母様のことですよ。私の母のことじゃあない。私の母が貴方のことをとやかく思うことはないでしょうからね。私の母が貴方のお母様だったら話は別かもしれません。その時は私たちは母同じの兄弟ということになりますが、そんなことはない。許されないことです。母が同じだというのは許されてはいけないのです。そうお母様も願っておいでだと思いますよ。私が

俳優２　そうですね。詩というのはそういうものかもしれません。けれど確信して言うのですが貴方のは、それ詩じゃあない。詩というのは降って来るもののようですから。この雨のように、ね

俳優　泣いているようじゃあありませんか？　この雨

俳優２　雨って亀で踏めますね

俳優は微笑む。

俳優２は呆然とする。

俳優　鮫でも

俳優２　豆でも

俳優　矢でも鉄砲でも持って来い

俳優２　こっちだこっち。そうそうありがとう。ちゃんと弾も入っている？　そりゃいいや。ありがとね。はい、鉄砲

鉄砲は想像上の鉄砲である。

俳優　おう。バーン（鉄砲を撃つ）
俳優２　死にましたか？
俳優　死んでなきゃ私が困る。殺人罪で捕まってしまいますからね
俳優２　現行犯逮捕だ。おとなしくお縄につけ
俳優　なんの罪ですか？　私は何もしていませんわ
俳優２　いいえ、貴方は想像力で人を撃ったんだ。貴方の想像力は誰かの胸を打ったに違いないのだよ。私は、そう思う。そう思っているよ
俳優　先生……こういうことなんですかね？　詩が降ってくるというのは
俳優２　母はまな板で何かを切り刻んでいる時、詩を詠んでいた
俳優　雨の日のまな板ですね
俳優２　それじゃことわざじゃないですか。雨の日のまな板
俳優　どういうことわざなんですか？　すみません。私、勉強不足なんですよ。パチンコとキャバクラと釣りしか趣味がないもので。肉体労働者ではないと言い聞かせているんだ。お前は教授だ。お前は教授だ。って毎朝鏡に向かって。でも決まってそこにいるのは日に焼けた黒光りする歯のないおじさんなのだ。教授には歯があるが肉体労働者には歯がないのだよ。なぜかわかりますか？　ワークマンです。違いは。歯医者が怖いのですね。肉体労働者は。ほら、歯医者は大卒だから。難しいことを言って暴力振るいますでしょ？　Ｃのなんたらとかｆのなんたらとか言いながら歯に暴力振るう。歯医者だけじゃない、医者、弁護士、大卒は学歴で暴力振るう。テクストとか、構造とか、思想とかを振りかざす。肉体労働者は違う。暴力振るう。それは純粋な暴力だ。バカにしてんのかとか舐めてんのかとか。わかるもん。舐めてるのかとか舐めてないのかとか、ね

植木屋の親方と弟子がチョキチョキやっている。

親方　おい、てめえ、そんなこともできねえのか。はあ？　ここ掃除しとけって言ったよな。言ったよな。いつ言った？　俺が言ったのか？　言ったんだよな？　聞いてた？　聞いてたんだよな？　なんだその目は。そんな目で俺をみるな！　きちがいじゃねえんだ。俺は。長え話する

ことになるぞ。ああ？　日本語わかんねえのか？　てめえ。いいか、そのイカれた脳みそでどう考えたかしんねえけどよ、金払ってんだからよ、やれよ仕事。仕事ってのはそういうことだろ。金もらったやつが金払った奴にひれ伏すんだよ？　ひれ伏せよ。ああ？　だから、何見てんだ。なめてんのか。ああ？　みてんじゃねえよ。俺は！　俺はきちがいじゃない俺は親方だ。俺は正常なんだよ。職人てのはよ、ちゃんとした技術でお客さんに喜んでもらう。そうだろ？　日本語わかんねえのかよ？　ああ？　てめえ！　舐めやがって！　舐めてんじゃねえぞ！　金払ってんだぞこっちは！　金払って教えてんだよ。学校じゃないんだよ。仕事。舐めてんのか！　舐めてないのか！　舐められて喜ぶ奴はいないんだよ！　舐めてんのか！　気合い入れて本気でやれ。おかまじゃねえんだろ？　じゃあ、やれ。ボケが。長い話になるぞ！　俺はなんども同じこと言わされるのが一番嫌いなんだ。ぶっ殺すぞ！　いいか！　次はない、次は無いからな。おい！　聞いてんのか！　聞け！　全て、余すとこなく全部聞け。俺は親方なんだ。お前の親方なんだ。家父長制のメタファだ。わかるか？　わかるのか？　本当に。目を見ろ。見るな！　俺をそんな目で、キチガイを見る目で見るな！　俺は普通なんだ。俺が社会で、俺の会社で、お前は勝手なことをするなって言ってるんだよ。大人なんだからそんなんじゃこれから困るだろって話をしてるんだ。おい！「はい」だろ。元気よく返事してたらお互い気持ちよく終わるだろ。今のままじゃ気持ち悪い関係のままだぞ。いいのか気持ちが悪い関係で。いいか、俺が親方で、お前の親方なんだ。舐めてるのか！　舐めてないのか！　舐めてないのならいうことを聞け。全部舐めて、舐め尽くせ！　お前のためを思って言ってるんだ。長い話を。わからないことあったら、なんでも聞け。親方の俺に。すぐ聞け。いいな。すぐ聞くんだぞ。これが親方が語る長い話だ

弟子　はい、すみません

親方　わかればいいんだよ。最初から素直になろうよ

弟子　親方あ

親方　ああ？

弟子　雨降って来たんで帰ります。植木屋なんで

植木屋たちは急いで帰る。
雨の日の植木屋は仕事をしないものだ。

俳優２　それこそ雨の日のまな板ですよ
俳優　いい意味なんですか？
俳優２　今でも百均なんかで売ってますけど、生いたってもともと木で出来てたんですね。生の木です。生いた。だから雨の日にカビるって意味です。転じて、プラなどの方がいいよねって意味にも使われます
俳優　それだとなまの板ですよね。まなはどこからきたんですか？
俳優２　まなは魔力の源ですよ
俳優　貴方のお母様は、魔女ですね
俳優２　お母様は魔女と言ってもいいかもしれない。言葉の魔法を使っていたんですものね。詩という言葉の魔法を
俳優　聞きたいなあ。お母様の詩
俳優２　ひとつだけ覚えているので吟じてみます。笑わないでくださいね
俳優　ええ。笑いませんとも
俳優２　ふんふんふんふんふんふん
俳優　それは詩じゃあない。鼻歌だ。鼻歌だよ
俳優２　お恥ずかしい限りで
俳優　いいですか？　私は本当は教授じゃない。貴方が私を見ているのは本当の私じゃない。私は教授じゃないんだ。私は歯がない。歯がない肉体労働者だ。それを知って欲しかった。教授じゃない。そんな肉体労働の私だから貴方に言えるんです。鼻歌のこと。それは詩じゃない。鼻歌だ。鼻歌は、労働者の歌。お母さんは肉体労働者なんだよ
俳優２　私が思っていたのとは母は違ったのか
俳優　雨が。泣いているようじゃありませんか
俳優２　雨は泣きませんよ。人間じゃないんだから。バカはいつもこれだ
男　助けてください。落ちているんです。届かないのです。繋がれないのです。どこまでも落ちていくんだ。俺は

俳優　そんなところで、濡れてしまいますよ（男にビニール傘を渡そうとするがうまくいかない）

俳優２　邪魔しちゃいけませんよ。傘なんか。メリーポピンズじゃあるまいし

誰も笑わない。

俳優は傘をさす。

俳優、俳優２は相合傘で去ってゆく。

雨は止んだのだろうか。

先生と子供たちがしりとりをしながら。

とても微笑ましい光景だ。

しりとりをする時は最後の音、文字を強調しがちである。

それも微笑ましい。

先生　いちご

子供１　ゴリラ

子供２　えーと、ラッキョ

子供３　「きょ」？「よ」？

先生　どっちでもいいわよ

子供３　よりどころ

子供４　「ろ」。労働

子供５　「う」。うちでゴロゴロしてる方がマシ

先生　「し」。「し」かあ。仕事仕事仕事、ほんとなんのために生きてるのかわかんないわ

子供１　私

子供２　死んじゃった方がいいのかしら

子供３　ランドセル背負ってたあの頃が懐かしい

子供４　いや、いや、そんな後ろ向きじゃダメよ。頑張れ！笑顔よ！私！

（鏡を見ている様子で）

子供５　シミかしら（鏡を見ている様子で）嫌だわ。年は取りたくないわね

子供４　ねえ？　あなた。愛してる？　私のこと（鏡ごしに聞く）

子供５　当然さ。愛しているとも

先生　もう。ずるい。そうやってはぐらかすんだもん。いつだって

子供１　手を出してごらん。（手を取る）ほら、僕の目を見て

子供２　手。あなたの手、温かい

子供３　言うよ。……僕は君を愛してる。結婚したっていいんだよ

子供４　よく言うわ。奥さんと別れてくれないくせに

子供５　憎まれ口を叩くなよ。僕にだって事情というものがあるんだ

先生　だって、だって、いつもいつもそうじゃない

子供１　いいかい？

子供２　いつも、いつだって僕は君を思っている。それは疑いようのない真実さ

子供３　「さ」……さあ、顔をあげて。誓うよ。僕は生涯君を愛す

子供４　「す」……好き

子供５　キンタマ！

先生　ダメよ。もっと綺麗な言葉にしましょう？

子供５　綺麗なキンタマ！

先生は嫌がる子供５をどこかへ連れてゆく。

クマのぬいぐるみを子供５のいた場所に置く。

先生　さあ、お歌を歌いましょう

子供たち　はーい

男　おーい！　助けてくれ

「君が代」か何かを歌う。

男は時おり「おーい」とか「助けてくれ」などと言う。力無い。

客席からヒステリックな笑いが起こる。

たいていの場合男の不快な笑い声である。

先生はキッと睨む。

楽しそうでとても微笑ましい光景だ。

歌が終わり、先生に連れられて子供達は去る。

クマのぬいぐるみだけが取り残される。

男　あのぬいぐるみは俺と同じだ。俺があのぬいぐるみと同じなのか。

あいつはあそこにひとりで取り残されて、何ものとも関係がない。

ああ、言葉。落ちてゆく

「金たまを握られている」

親方と弟子が仕事を再開する。

親方は三脚に登って木を剪定している。

親方は話すとき三脚を下り、話が終わればまた三脚を登る。

つまり、登ったり下りたり。

弟子　親方あ。この辺りの雑草むしっておきます

親方　ああ？　ああ

弟子　この草はとっていい草ですか？

親方　くだらねえこと聞くな。ボケが！ぶっ殺すぞ。とっていい草かとったらまずい草かもわかんねえのか！ぶっ飛ばし、殺すぞ！わかんねえのか！わかるのか！

弟子　取りまーす

親方　おいおいおいおい！それとったらまずい草だよ！どうすんだよ！草はすぐに生えないんだよ。一回とったら終わりなんだよ！草取りもできねえのか！殺すぞ！

弟子　草取りはできます。現にこうやって草とってます

親方　ああ？　ああ

弟子　親方あ

親方　ああ？　ああ

弟子　このとったらまずい草はなんていう草ですか？
親方　草だよ！ 草！ くだらねえこと聞いてんじゃねえ！ 殺すぞ。くだらないこと二度と聞くんじゃねえぞ
弟子　はい、もう二度と、質問しません
親方　ああ？ ああ
職人　お茶ですよ

年老いた職人がお茶を持ってくる。

親方　ああ？ ああ。茶にするぞ（座って、携帯をぽちぽちやる）

弟子と老職人は親方から離れて座る。

弟子　この草ってなんて言うんですか？
職人　これはイヌフグリだね
弟子　へえ。（メモを取っている）これはなんですか？
職人　これはオオイヌフグリだよ。これはタチイヌノフグリ
弟子　ありがとうございます。これって除草しちゃっていいんすか？
職人　いいよいいよ。全部草だから。イヌフグリは絶滅危惧種だけどね
弟子　いいんだ、取っちゃって。詳しいすね
職人　まあ、長いからね。あ、これあなたも（男にお茶を渡そうとするがうまく渡せない）
男　助けてください。落ちているんです。わたし

親方立ち上がって。

親方　いつまで休んでんだ！ ぶっ殺すぞ！ おい！（弟子に）てめえ！ 聞くことあったら俺に聞けって言っただろうが！ 舐めてんのか！ 舐めてねえのか！ おい！ てめえ（老職人に）こいつ舐めてるよな？ なあ？
職人　いや、はあ（そんなこと言われても困る）
親方　ああ？ 舐めてるのか。舐めてねえのかって聞いてるんだよ！ はっ

きりしろ。ぶっ殺すぞ！ てめえ！ おい！ こら！ てめえだいたい、他の植木屋で人のトラックで人轢いてどこからも仕事もらえなくなったから俺が仕事やってるの忘れてねえよな？ おい！ 忘れてねえよなって聞いてるんだよ！ いい加減にしろよ！ 殺すぞ！

職人　いや、本当にありがたく思っています。すみません。二度と無いようにします

親方　ああ？ 二度と無いようにって何回言った？ 今日この俺の現場来て何回言ったよ？ ああ？

職人　ああ、いや

親方　何回言ったのかって聞いてるんだよ！ 答えれねえのか！ 答えれねえくらいいっぱいだよ！ ああ？ てめえ、そんなんだから他の植木屋から仕事もらえなくなったんじゃないのか？ ああ？ しんどそうに仕事すんなって言ってるんだよ！ クレームきたらどうするんだよ！ 俺の現場なんだぞ！ おい！ 聞いてるのか！

職人　はい、それはもう

親方　それはもうってなんだよ！ ああ？ しんどそうにするなって言ってるんだよ！ ハキハキぱっぱって動いて仕事しろって言ってんだよ！ 頭おかしんじゃねのか？ てめえみたいなやつが人になんか教えたりできるのかよ！ ああ？ できねえだろうが！ 人間の失敗作になんか教えることあるんですかって聞いてるんだよ！ おい！ こっちみろ！ なんだ？ ああ？ なんだその目は！ 俺はきちがいじゃねんだよ！ 頭おかしいんじゃねえのか？ ああ？ 病院行ったほうがいいぞ。お前みたいなのは。ほんと。おい！ 何見てんだ！ （弟子に）早く仕事しろって言ってんだよ！ 見てんじゃねよ。親方か？ お前は親方か？ ああ？ 仕事しろクソが！

弟子　はい

老職人仕事を再開しようとする。

親方　おい！ てっめえ！ おい！ 話終わってねえんだよ。なんでてめえが話が終わったのか終わってないのか判断すんだよ！ 俺が決めんだよ！ 俺が親方なんだよ。親方づらしてんじゃねえぞ！ ぶっ殺すぞ

弟子　親方あ
親方　ああ？
弟子　神様っているんすかあ？
親方　ああ？　いるに決まってるだろ！　くだらねえこと聞いてるんじゃねえ！　ぶっ殺すぞ！　おい！　（老職人に）神様がいねえとか思ってんじゃねえよな！　お前まさかいねえとか思ってんじゃねえだろうな？
職人　はい、ええ、まあ
親方　ああ？　まあってなんだよ！　はあ？　ちゃんとやれよ！　殺すぞ。いいか、次はねえからな。次はねえって言ってんだよ！　わかったのか！
職人　はい
親方　（三脚に登りながら）俺今からちょっと打ち合わせ行ってくるから。あとちゃんとしとけよ。あと、あいつの事ちゃんと指示して草取らせとけよ。いいな
職人　はい
親方　（三脚を下りながら）じゃあ、あとよろしくー（明るく）

親方去る。

弟子　もう帰っちゃいましょうか（親方の三脚を乱暴に倒す）
職人　そうですね。もういいよ
弟子　イヌフグリ、イヌフグリ（メモをとる）

劇作家現れる。

劇作家　犬ふぐり星のまたたく如くなり
職人　高浜虚子ですな
弟子　おお。博学爺さんですな
職人　いやいや、俳句やってたんですよ。昔ね（咳き込む）
弟子　大丈夫ですか？
職人　大丈夫大丈夫（フラつく）

劇作家　金たまをのせて重たき団扇哉
職人　睾丸ね。金たまじゃなくて。正岡子規……（フラフラだ）
弟子　ちょ、大丈夫じゃない！ 救急車救急車
職人　大丈夫。俺ね、癌なんだよね。ステージ４だって（恥ずかしそうに）
弟子　５０くらいまであるんですか？
劇作家　ないない
職人　４までだよー。でも大丈夫、全然進行遅いんだって。全身に転移してるんだけどさ、前立腺癌なんだよ。前立腺癌って進行遅いんだって
弟子　そうなんすね。平成天皇と一緒すね。じゃあ
職人　そうだっけ？ でも時々しんどくなっちゃって。親方には人に言うなって言われてたんだけど。秘密ね
弟子　いやあ、もちろんす。今日、あとやっとくんで帰っていいすよ
職人　いやあ、ほんとごめん。今日、ちょっと調子良くなくて（帰る）
弟子　お疲れーっす

弟子片付け始める。

劇作家　あのう
弟子　はい
劇作家　私ね、劇作家なんですよ
弟子　へえ。僕も作家してます
劇作家　想像力食べてあげましょうか。あなたの
弟子　いいすよ。もうなんでもいいす。どうせ劇もする暇ないし
劇作家　私、想像力が大好物なんですな。食っても食っても満たされぬ劇作家ですんで
弟子　あ、僕は焼肉ですね
劇作家　睾丸の邪魔になつたる涼み哉。子規ですな（ペロリとやって、去る）

犬の鳴き声。
男にだけ聞こえた様子だ。

弟子、片付けて去る。

男の前に犬の散歩紐が垂れる。

紐を掴むと、グッと引っ張られてしまう。

男　水平に？　落ちる！　水平に滑り落ちていく！（不安から紐をより強く握る。手に巻きつけてもいい）

散歩紐の先には小さな（小さいといっても１０キロはある。ボストンテリアの中では大きい）ボストンテリア。

犬　犬は走る。走るものは犬。犬として僕は走る。そら！　あっちだ！（あちらこちら走り回っている）こっちか！

男　俺の落ちる先に走る犬だ。走る犬が、いる。犬に向けて落ちてゆく

犬　見つけた。見つかった？（振り向く）僕の名前を呼ぶのはどうかな。犬は名前を呼ばれるのが好きさ（期待している）

男　（少し驚き）パブロフ。パブロフ！　……お散歩好き？

犬　（男に近づき）いいね。散歩も好きだよ、僕は（男とパブロフは互いに急接近し、交差する）

パブロフの速度（今はお散歩）で水平に滑り落ちてゆく。

パブロフへ、落ちてゆく。

パブロフの後ろ足の間には金玉袋がブラブラしている。

夕暮れだろうか。

踏切の音が遠く聞こえる。

俳優　１９９８年１１月１７日、Ｓ県Ｙ市北北東にあるＴ山上空に出現したのは巨大な犬の金玉袋。Ｔ山を挟んでＹ市に隣接するＯ町では巨大な犬の金玉袋が振り子のように揺れるのに合わせて陰になったり陽がさしたりした。同日１５時２６分「目がチカチカするという体

調不良」を訴える小学三年生の男子児童一人と茶畑で作業中の老婆三人が救急搬送される。８歳、６９歳、７８歳、８１歳。かつては東海道の宿場町として栄えたＯ町はその後２００９年、Ｆ市に吸収合併されてポンと消えた。ポン！ １９９８年１１月１７日、Ｙ市から見えるＴ山上空に浮かんだ巨大な犬の金玉袋。周辺の茶の間に様々な映像、音声コンテンツを届けてくださっているＹ市随一の巨大建造物であるところの鉄塔に刺さるんじゃないか、いや、刺さるまいという議論を巻き起こしていた。犬の金玉袋鉄塔刺さるのかいや、刺さるまい問題である。議論など平時したことのないＹ市の住民は燃え上がる議論に耐えきれなかった。議論の炎に身を焦がしながらそこいら中で殴り合いが始まった。「ちくしょー」「俺は間違ってない」「そんなのわからんだろうが」「このファシストめが」「ファシストってなんだいな？」「イタリアのワインじゃ」。今でもＹ市では拳と喉を痛めた老人たちに出会うことができる。下駄屋の息子として生を受け、当時オフィスのコピー機の修理技師をしていた曽根やんこと曽根さん。パンパンに膨れ上がった議論の圧力に耐えきれず殴り合いを始めるＹ市の住民たちにがっかりし、幼馴染である漁師の息子で地元プラモデルメーカーの設計技師をしているマーちゃんこと河合さんに赤旗を届けに行く。マーちゃんは農家の娘のよっちゃん家に婿入りし、今やリーマン農家の二足の草鞋マンである。マーちゃんは特に思想というものを持たなかったが、曽根やんから届けられる赤旗によって市民の自覚というものと恥を知っていた数少ないＹ市市民の一人である。市民は教育によって育つという好例をマーちゃんはやってのけた。曽根やんはマーちゃんに言った。「問題はさあ、マーちゃん。あれがＴ山の鉄塔に刺さるかどうかだよ」。マーちゃんは顎に手を当てて考える。本当にそれが問題なのか、どうか。マーちゃんは曽根やんに熱々の緑茶を出しながらこう言った。「Ｓ県は、全国の茶園面積の約４０％を占める茶どころです。鉄塔に刺さったら、痛いだろうね、あれは」。マーちゃんは優しい男だ。曽根やんは己の不明を恥じた。そうなのだ、ここで問題にすべきはそれが金玉袋であるということ。そして、金玉袋に何かが刺さることは痛いということなのだ。男なら誰でも知っている。いや、女でも

知っている。子供だって知っている。犬だって知っている。知らないのは草くらいさ。へいへいへい。金玉袋に何かが刺さることが痛いということは人類不変の真理なのだ。マーちゃんと曽根やんはゆっくりとお茶をすする。お茶はすでにぬるく、非常に飲みやすかった。曽根やんは自分が猫舌であることを思い出した。マーちゃんは猫舌の曽根やんが猫派であることを思い出した。マーちゃんは犬派である。二人は共に二児の父で幼馴染だ。長い人生の折り返し地点に、二人はいた

男とパブロフをジッと見つめる一つの影。
役人が見ているぞ！

犬　ねえ、金たま浮かんでるね
男　うん、浮かんでいるね
不安だ。空に浮かぶ巨大な金玉袋が揺れているのを見ると不安になる。自然と俺は俯いて歩くようになった。いや、元来俯いていて歩いていたのかもしれない
役人　俺、今、落ちてる？ まだ落ちているかな？（パブロフに）
男　あなた、税金払っていませんね
犬　え
役人　藪から棒になんだい、この人はなんだい？
犬　ワンちゃん。僕は税務署から来たものです
男　じゃあ、役人だ。さては役人だねー
犬　そうだね、役人だ（笑う）
役人　役人だ。おかしいな（笑う）
犬　おほん（咳払い）。税金のお話なのですが、あなた失礼ながら払っておられないでしょう。台帳に記入がない
役人　おい！ この人は立派なお人ぞ。税金の一つや二つ払ってらい！ なあ？ そうだろ（男に）、そうだと言っておくれよ
男　……うん
犬　嘘だい！ 嘘だい！ 税金を払ってねえってそんなことないんだい！
（ワンワンと泣き出してしまう）

男　すまない。税金を払ったことがないんだ
役人　困りますな。税金を払っていただかないと。困ります。私が、ということじゃあない。みんなが困る。そうでしょう？ この土手。どこまでも続くこの土手の道は税金でできている。違いますか？ 空気。この空気は？ 税金でできている。全てのものは税金でできているんです。税金でできていないものなんてないんですから。森羅万象を担当！
男　（ハッとして）森羅万象を担当！
犬　違うわい！ 僕は税金でなんかできちゃいない！ 僕は犬だい！
男　パブロフ
役人　ワンちゃん……
男　違うんだ。パブロフのご飯も全部税金なんだよ。だからパブロフだって遠縁の税金なんだよ
犬　嫌だい！ 嫌だい！ （仰向けで体をくねらせる）
役人　さあ、払っていただきましょう。税金を
男　待ってください。持ち合わせがない。私はさっきまで落ちていたんです。長い間落ちていたんだ。控除はできないんですか？
役人　みなさんそうおっしゃいますが、落ちている時にだって労働に勤しめたんじゃあありませんか？ あなた、ただバカみたいに口を開けて落ちていたんですか？ そんなわけないでしょう。見たところ、失礼、あなた健康そうな体ですね。年齢だって、（台帳をめくる）４０でしょ？ 男の４０は厄年ですな。あなた、本厄のあなた、ただ、落ちてたっていうんですか？ そんなことに控除なんて認められませんよ？
男　……はい
役人　職安にでも行って、なんでもいい。税金を稼いできなさい。ほら、散歩は終わりです
犬　終わりなの？ お散歩（男に）
男　いや、行先が変わるだけさ
犬　（匂いを嗅ぎまわり）あっち！ 職安の匂いだ！

パブロフは歩きだす。

男、パブロフへ向けて落ちていく。

職安。

劇作家が相談を受けている。

男は従順に待つ。

彼は犬のように従順な男であった。

職員　次の方

劇作家　はい

職員　えっとご希望は、芸術関係のお仕事、ということでいいですか？

劇作家　はい。職歴としてはコンビニのバイトとバーテンダーなんですけど、２０年くらい演劇をしていまして。演劇と言っても俳優ではなく演出と台本を書いていましたので、それを生かせればと。俳優ではありませんので、多少インテリかと思います

職員　ないですね。すみません。ないですね

劇作家　なんと。そうですか。多少のインテリだと、ないですか

職員　ないですね

劇作家　どういう仕事ならありますかね？　大卒です。短大ではなく長大です

職員　そうですね。肉体労働とか工場作業員とかそういう仕事ですかね。あとは飲食の経験がおありということなので、そういう

劇作家　飲食の

職員　そうです

劇作家　芸術関係は

職員　ないです

劇作家　では、アート関係はどうでしょうか

職員　ないですね

劇作家　物を書く仕事みたいなのは

職員　ないです

劇作家　記者とか。何かの記者とか編集者とか。いっそ、そういうのでもいいです

職員　そういうのはハローワークにはないですし、あなたの前歴だと難しいと思いますよ

劇作家　ほう。才能はあると思うんですよね。劇作家なんで。戯曲書けますし。多少インテリだと思います

職員　ないです。ないです。才能あったら、ここに来てないでしょうし（苦笑）。言いにくいですけど。身の丈にあったお仕事から探された方がいいと思いますよ

劇作家　そうですか

職員　力になれなくてすみません

劇作家　いえ、ありがとうございます

職員　次の方

劇作家俯いて、帰ろうとする。
男とすれ違う瞬間、顔を上げる。

劇作家　私、劇作家なんです

男　以前、お聞きしました

劇作家　税金さえなければこんなところに来ないんですが

男　まあ、あなたも未納の人

劇作家　ええ、まあ。（小声で）職安はお話になりません。私、今から新聞社に行って、雇ってもらえないか。新聞に戯曲を連載できないか。記者でもいい、この際、インテリ気味でいいから仕事をくれと直訴しに行きます。私ね、（もったいぶって）今年本厄なんですな

男　そうですか

劇作家　お互い、頑張りましょう！　では（意気揚々と出て行く）

職員　はい、次の方。いらっしゃいませんか？

犬　呼んでるよ

男　はーい

職員　このワンちゃんは？

犬　付き添いです

職員　そうですか。えっと、どんなご職業をご希望ですか？

男　そうですね。えっと、ど、どんな職業が世の中にあるのか知らなくて……

職員　ああ、なるほど。えと。今までどんなご経験がおありですか？
男　ええ？　え？
職員　これまでにどのようなご経験が、おありですか？
男　あ、ああ。愛知の
職員　それは尾張ですね。おあり。尾張じゃなくて。今までどんな経験がありますか？　何してきたのですか？　今の今まで。とお聞きしました
男　え。あ、はい。長い間落ちています。それはそれは長い間落ちているように思います
職員　はい。現在、落ちている無職、と（パソコンに何やら打ち込んでいる）。その前は？
男　その前？
職員　落ちる前です。落ちたんですから。落ちる前というのがないとその、リアリティっていうんですか？　人生を感じませんよ。あなたにだって落ちる前があったんじゃないですか？　子供時代や、思春期、青年に成長して、今はおじさんだ（堪え切れず笑う）。失礼
男　おじさんです。大丈夫です。おじさんは受け入れています。ヒゲも濃くなりました
犬　僕もあるよ。おひげ
職員　その、だから、落ちる前です。何をされていましたか？
男　教室の窓から、外を、空を見ていました。いつも。遠いどこかを見ていました。私、東海地方のちょっとした漁港の町に生まれまして。校舎からは海も見えた。ずっと透明の青かったと記憶しています

俳優が現れて。
男たちは俳優をジッと見る。
パブロフは前足を舐める。綺麗好きな犬として。

俳優　マーちゃんの長男はその日、音楽室前の廊下の窓から見える巨大な犬の金玉袋を見ながら幼馴染のYさんのことを考えていた。彼はそれが初恋であることをまだ自覚していなかったし、その初恋が実を結ばないことをまだ知らない。おでこのニキビがチャーミングな中

学生だ。目下、彼の問題は揺れる犬の金玉袋でも高校受験ですらなく、Ｙさんから借りていた鈴木光司の『リング』の感想だった。小粋でうざくなく、好感を持ってもらうような感想。空に浮かぶ巨大な犬の金玉袋を眺めながら『リング』の感想を必死に考える中学三年の彼のおでこには大きなニキビがあった。ニキビはチャーミングだったが、本人はむしろ嫌っていた。ニキビ当事者とはそういったものである。マーちゃんの長男の思考は八艘飛びする。「いや、むしろ感想どうこうじゃなくどこでどのように感想を言うか、その路線でいけばいいのではないか?」。マーちゃんの長男は中学生らしい浅ましい計略を思いつく。後に彼はそれを演出と呼んだ。Ｙさんとあの巨大な犬の金玉を見に行こう。そこで『リング』の感想を言えばいい。校庭からは野球部のウエーとかオエーとか声変わり最中の汚い掛け声が響いていた。打ち上げられたライトフライの白いボールが宙に浮く。

１９９８年１１月１７日、Ｓ県Ｙ市北北東にあるＴ山上空に出現したのは巨大な犬の金玉袋。同年１１月１８日午前４時１４分、しし座流星群の大火球が東日本で観測された。同時刻、Ｙ市上空に浮かんでいた巨大な犬の金玉袋は「キャン」と言う犬の鳴き声と共に消える。すでにぬるくなった午後の紅茶ミルクティーのスチール缶を渡しながらマーちゃんの長男はＹさんに言った。「あの、あれだね、悲しい話だったね。怖いって言うか。悲しい話だったよ。あの、どっちかと言うとね。映画も観たけど、映画より小説の方が詳しくて良かったね。どっちかと言うと」。Ｙさんはミルクティーのお礼を言うと、自転車を漕いで帰っていった。爆走という言葉そのままを表象していた。マーちゃんの長男は思った。いつか絶対犬を飼うぞ。金玉の揺れる犬を。その犬はパブロフと名付けられることになる。２０２０年Ｔ山山頂の鉄塔は撤去され、マーちゃんの長男は劇作家で失業者だった。

俳優満足げである。
長いセリフをちゃんと言えた安堵感。
笑みさえ浮かべているかもしれない。

去れ！ 早く去れ！

職員　劇作家（パソコンに何か打ち込んでいる）。と

男　俺は劇作家？

職員　ないですね。劇作家の仕事はありません。劇でもやってればいいんじゃないですか？ 趣味で。賞とか応募して、受賞されれば何かしらの税金払えるでしょう。それまでは、まあ、下積みですね。下積みしましょう。応援します。ね。ゆくゆくは２・５次元っていうのですか？ イケメンとか美少女の演出でもして、ね。がっぽがっぽですよ？ ね？ 大学とかで教授とか。私立の。ね？ だから、それまでは下積みしましょう。下積みは私ども大得意ですよ。ご紹介します

男　はあ。例えばどんな

職員　植木屋なんぞどうでしょう。日給月給の日当８０００円で正社員。福利厚生、ボーナス、社会保障、有給も全部ありません。ナシナシ案件。お得でしょ？ それで、庭を作ります

男　そんなに無いのか。それはいいですね。でもなあ、怒るでしょ？ 私、落ちてるときに見ちゃったんですよ。植木屋の一部始終全部。怒られるのはちょっと苦手なんです。あんまり怒られたくないなあ

職員　今、私が怒ってないとでも？

男　すみません。全然気づかなかったです。親切な方だとばかり

職員　困ったな……

犬　僕にできることはないでしょうか？ これでも人よりは鼻もききますし、耳も良い。燃費もいいと思います。僕が税金をというのは？

職員　いいワンちゃんだね。うーん。ワンちゃんのお仕事（パソコンを打ち込む）。盲導犬？ ですかな

犬　それします

職員　この無職と離れ離れになってしまいますよ？

男　それじゃあこれでどうですか？

男眼球を抉り出す。

たいそう痛がっている様子だ。

しばらくのたうち回る。

職員　あの、誠に申し上げにくいんですが、ワンちゃんへの支払いは貴方からです。その後の税金になります

男　え？ ちょっと聞こえません

職員　目です。今ダメになったのは。聞こえないふりしないでください

男　ダメだったか

犬　耳も取る？

男　ゴッホじゃねんだから

犬　アーティストじゃん！（男と犬は笑う。楽しそうだ）

職員　どうされます？ 耳も取られますか？

男　とりあえず、持ち帰って、こいつと相談してみます。無賃労働でもいいのかなど。労使関係に合意がなされればいいなと考えています

犬　よく話し合います

職員　そうですか。税金は本当しつこいですから、まあ、私がいうのもなんですが。また、相談に来てください

男　ありがとうございます

犬　いい人だったね。役人なのに

男　うん。いい役人と悪い役人がいるんだね

犬　勉強になった。勉強したらお腹すいちゃった

男　なあ、俺、今落ちてる？ 落ちてるかな？（突然不安にかられて）

犬　え？

男　いや。（切り替えて）商店街でメンチカツでも買いに行こうか

犬　いいね！ メンチカツ！ 僕キャベツ好き！ メンチカツの匂いは、あっち！

パブロフはメンチカツの匂いをたどって行く。

男、パブロフへ向け、パブロフの速度で落ちる。

寂れた商店街には夕日が似合う。

男　メンチカツふたつください

父　五分少々かかりますがよろしいですか

男　大丈夫です

父　５６０円になりますねー

男　はーい。５６０円。（財布をさぐる）あれ？　５６０円ないなあ。５０円でいいですか？　無職なんです

父　しょうがないなあ。５６０円です

男　父さんじゃないか

父　息子か。どうしてこんなところでメンチカツ買っているんだ

男　僕が何食おうと自由だ。父さんにとやかく言われるようなことじゃないよ

父　そうだな。父さんがとやかく言うようなことなんてもうほとんど残されちゃいないな。息子も４０だもんな。本厄だ。父さんも前期高齢者だ。前期高齢者が４０の息子にとやかくいうのは健全とは言いがたいかもしれないもんな。いいかい。息子。父さんがとやかく言うようなことはもう、ほとんど残されちゃいないのかもしれない。なぜだろうな。父さんなのにな。なぜ涙が止まらないんだろう。玉ねぎかな。玉ねぎかもな

男　父さん。父さんはどうしてこんな狭い所に挟まって、お笑い芸人になろうと思ったの？

父　うん。父さんはその日、母さんが出て行った日だな。今日だ。その日に思ったんだよ。今日にな。お笑い芸人になろうとね。だからかな、お笑い芸人になろうと思ったのは。その日に。今日に

男　父さん、俺もさ、お笑い芸人になろうかと思ったんだ、本当はね。でも父さんが先にお笑い芸人になろうと思ったからさ、なれなかったんだ。お笑い芸人に、俺さ。だから、仕方なしにだよ？　仕方なしに劇作家になったよ

父　息子。父さんにはもうとやかく言うことなんて何一つ残されてないことは知ってるだろ？　父さんにはもう時間がないんだ。それなのになぜ？　ってなったり、ならなかったりは息子、お前の自由じゃないのか？　違うのか？　違わないのか

男　俺さ、お笑い芸人になってさ、お金いっぱいもらえるじゃない？　お笑い芸人てさ。そりゃ最初は下積みっていうの？　そういうの我慢してたらその後の１０年くらいで全部回収できるじゃん。人生の貯金

みたいなもんじゃん。どうせ普通に働いてもたいしてお金になんないんだからさ。下積みしても変わんないじゃん。そんでお金いっぱい、両手いっぱいのお金抱えてさ、父さん、あんたに会いに行くつもりだったんだぜ。それで「お金いっぱいあるからさ、父さん。ハワイ行こうぜ」って。それが俺のあれだった。あれ。計画。大人の計画。でもさ、父さんが先にお笑い芸人になるって思ってさ。じゃあさ、俺が下積みしなくていいじゃんって。父さんが下積みしてくれるなら俺下積みいらねえじゃん。て。だから、劇作家にした

父　そうか。ごめんな、息子の気も知らないで父さん先走って下積みし始めちゃったのか。ごめんな息子

男　いいよ。父さん。許す。許すよ。父さんを、許す

父　息子。時に、息子よ。勇者息子よ。父さんをここから出してくれないか

男　父さん、挟まってるじゃないか。ここに。ここに挟まってるぜ。なぜこんな狭いところに挟まってるんだい？ ここは挟まるとこじゃない。狭いところだよ。狭いところであって挟まるところじゃないぜ。父さん

父　そうか、そんなに可笑しいか。じゃあ父さんの勝ちだな。父さんはお笑い芸人だからだぜ

男　父さん。天才じゃないか！ 天才お笑い芸人じゃないか！ 天下獲ったな

父　だから！ 早く出してくれ！ この狭いところから。出して欲しいんだ。この狭いところから。早く。もう嫌なんだ。こんな狭いところに挟まっているのは。みんな笑う。この商店街を通るみんな、肉屋の狭いところに挟まってる父さんを見て。肉屋で下積みをし出した前期高齢者のお笑い芸人を。指を差すんだ。人はそれぞれみんな違った指を持ってる。知ってたか？ 息子。父さんは指を差されるまで知らなかったよ、人々が一人一人違う指をしてるなんて、知らなかった。だから、ハッとしたよ。気づいた時に。人々の指の違いに気づいた時、ハッとした。違う！ 一人一人指が絶妙に違うって！ それで唸った。うむってな。うむってさ、唸ったことあるか？ 父さんはなかった。うむって唸ったことがさ。それでハッとしたんだ。2

男　回目な。ハッとするの。２回目のハッとして。父さんさ、母さんの指思い出せないんだ。母さんの指ってどんなんだったっけ？ これが３回目のハッとするのだ。息子？ 母さんの指はどんな指だ。母さんはどんな指で父さんを、俺を指差して何を言った？ 息子？ いるんだろ？ そこに。父さんに教えておくれよ

父　父さん。けして終わらない芸人になった僕の父さん。あの日、あの時母さんは父さんを指差して言ったよ「この夢見がち！」って。母さんはそう言った。「この夢見がち！」って言ったんだよ。母さんの指は白か肌色だった。黄色だったかもしれない。そうか。みかん。みかんだよ。父さんを指差したその人差し指にはみかんが刺さってた

男　そうだよ。思い出したかい？

父　みかんだ！ 母さんの指はみかんだった。みかんだ

男　母さんに指差された俺は。俺がみかんだったのか

父　さあ、顔を上げて。父さん。メンチカツが揚がったんじゃないかい？ せっかくのメンチカツが焦げちまうぜ。メンチカツはきつね色さ

父　本当だ。メンチカツの出来上がりだ。さあ、これをもってお帰り、息子よ

男　ああ、ありがとう父さん。お笑い芸人になった父さん

父　こちらこそありがとう。いや、ありがとうございました。５６０円になります

男　はい５０円。……あのさ、父さん。今晩はメンチカツ食べるのかい？ もらえるんだろ？ 下積みのお笑い芸人はバイト先の食料を

父　そりゃ楽しみだな。母さんもう待ちきれないだろうか

男　４時半にはスーパーのシフト終わるからもう家にいるよ

父　じゃあメンチカツもう一個揚げて帰るよ。少しでも多くの売れ残りを作らなくちゃな。売れ残らなけりゃただで持って帰れないもんな。父さんは売れ残りを死ぬほど作って、ただで腹一杯食ってやるんだ。父さんの第二の人生は売れ残り製造機だ。指差されながら。笑われながら、父さんはメンチカツを揚げる。それが父さんの下積み

男　うん。父さんの下積みをさ、みんなが笑っても俺はさ、息子だから。笑わないよ。息子だもん

父　いやいや、そこは笑ってよ。父さんはお笑い芸人だぜ

男　ほんとだね。可笑しいや。父さん笑いに貪欲だなあ。若手みたいだぜ！　見た目は師匠なのに。見えないんだけどね。俺、もう何にも見えないんだけどね。目が無いから

父　ははははは

男　ははははは

父　さて、この狭いところから出られるように父さん、なんとか必死にもがくからさ。必ず売れ残り作るからさ。たくさんの売れ残りのメンチカツ

男　父さん、見て！　行列だ！　俺には見えないけど。この寂れた商店街始まって以来の行列だよ。行列のできる肉屋のメンチカツだ。父さん！　みんな笑ってる！　みんな笑って、父さんが狭いところに、ここの狭いところに挟まってメンチカツ揚げてるのを指差して笑顔になって、行列作ってる！　蟻みたいに。みんな蟻みたいに行列をつくって……母さんだ！　母さんが笑ってる

父　母さん！　俺は、お笑い芸人になって、母さんが笑うのを見るのが好きだったから。俺は母さんを笑わせたくて、ハワイに連れて行きたくて、お笑い芸人になったんだ。安月給の中小企業のサラリーマンじゃ、ハワイなんていけなかったもんな。母さん！　息子！　早くここから、ここの狭いとこから、肉屋のここの狭いとこから父さんを出してくれ！　助けてくれ！　息子！　挟まってる！　挟まってるんだ！　狭いところに！

男　父さん、夕日が綺麗だね。（パブロフが男の手からメンチカツを奪い走りだす）ひゃー！　落ちるー！（紐を離してしまって）

商店街は夕闇に包まれるだろう。
夕方だっていつかは終わる。早めに。
夕方は早めに終わるものだ。

犬　（振り返り、男に）あの、あれだね、悲しい話だったね。怖いって言うか。悲しい話だったよ。あの、どっちかと言うとね（屁をこく）

屁をこいて走り出す。

男　落ちる。落ちてゆく。おーい！おーい！

大通りの交差点。
赤信号の音。赤は止まれ。

親方が、信号で待ちをしている。
軽トラが猛スピードで突っ込んでくる。
あ！

親方は宙に舞い。

赤信号の点滅。

落ちる。

男　助けてくれ。落ちていくんだ

弟子　（男の声に振り向き）あれ？今なんかぶつかりました？（車内。信号待ち）

職人　そう？気をつけてよ

弟子　大丈夫大丈夫。ここどこっすか？

職人　えっと、（携帯でマップを調べている）秋葉原？

弟子　まだ遠いっすね。パソコン詳しいんでしたっけ？

職人　うん。よく来たよーこの辺。おれさ、若い頃バイクも乗ってたんだ

弟子　かっちょいいー。多趣味！もう乗らないんですか？

職人　時間ないからなー

弟子　休みの日は何してるんすか？

職人　寝てるー

弟子　ははははは。わかるー。疲れますもんね。休み週一だし。俺も最近全然演劇してねえっす。あ、バイクってどんなの乗ってたんすか？

職人　モトクロスってわかる？　ああいうやつ。メキシコまで行って大会とかも出てたんよ
弟子　へえ。すげーすね。英語？　スペイン語とか喋れるんすか？
職人　勢い！　勢いで。砂漠を一週間くらいかけて行くのよ。バア〜っと走ってくのね
弟子　でっけーサボテンとかあるんすか
職人　あったあった。夕日もでかい
弟子　ウソー
職人　ほんとほんと。砂漠の夕陽ってでかいのよ。すげーデカかった。でかい！　丸い！　真っ赤！
弟子　……もうやんないんすか？
職人　若くないからなあ。君はいいよまだ若いんだもん。好きなことやりな
弟子　ええー。もう４０っすよ。本厄っす。爺さんす
職人　いやいや、まだまだこれからっしょ
弟子　いやあ、どうっすかね。あ、メキシコとかオーストラリアとかで植木屋やったらいいじゃないっすか。適当にジャパニーズガーデンとか言って金持ちから金巻き上げて
職人　君がやって成功したら呼んでよ。ブラブラ手伝いに行くよ
弟子　いいすよ。じゃあ、いろいろ教えてくださいね
職人　ははははは
弟子　砂漠かあ。モンゴルもいいっすね
職人　いいねえ、なんもないとこをバア〜ってバイク走らせてね。気持ちいいよ
弟子　いいすね……あのう
職人　なに？
弟子　この会社、長いんすか？
職人　うん、まあ……君、親方の事嫌いでしょ？
弟子　嫌いっていうか……怖いっす。純に怖いす（笑う）
職人　親方も勘違いされやすいからなあ
弟子　……
職人　昔から男の中の男って感じなのよ。漢気があるんだよな。腕もいい

しね

弟子　そうなんすね

職人　俺、おっちょこちょいっていうか、間が抜けてるっていうかそういうとこあって。他の植木屋から仕事もらえなくなっちゃったんだけどさ。親方が、それじゃ困るだろって

弟子　優しいんすね

職人　そうそう。優しい。顔に似合わず（笑う）口は悪いけど、君のこともすごい期待してるんだよ

弟子　そうなんすかね

職人　絶対、あいつはいい職人になるって。言わないでね。（笑う）俺もさ、親方に拾ってもらって助かってるっていうか、まあ、仕事しないと喰えねえしね

弟子　せちがれえっす

職人　ははははは

男　待って。誰か！　俺を助けてくれ！　落ちていく

信号は青へ。

青は進め。

軽トラは走り去る。

倒れている親方をウーバーの配達員が自転車でひく。

女　すみません。大丈夫ですか？

親方　痛え、痛えよ

女　血が、いっぱい出てる

親方　見えねえ、目が見えねえ。血を、血を流しすぎた。目が見えねえ。もう何も見えねえ。血を流しすぎた。血を流しすぎて見えねえ。目が。流しすぎた血のせいで目が見えねえ。痛い。目が痛い。真っ暗だ。目が見えなくて、真っ暗だ。血を流しすぎたせいだ。そうに違いない。そうだろうか。血を流しすぎたせいで目が見えないのだろうか。本当に？　そうだ。血を流しすぎたせいで目が見えないのだ。私は、目が。私の目が。血が、見えないのだ。足りないのだ、目が。闇だ。世界が。血だ。血の海だ

女　すみません。ウーバーの配達中で。俳優です。俳優の下積みでウーバーをしておるものです。急いでいた者です、私が。そうです。私がウーバーの配達員です。世の中にはウーバーの配達員をまともな職に就けない者だと見下す、そんな民草もおりますが、私もそう思います。しかし、それは私どもウーバーの配達員のせいでしょうか？私にはわかりません。私がわかるのは、あなたにぶつかったせいで時間をロスしているということです。いかねばなりません、私が。このメンチカツを待つ人がいるのです。私は行きます。しかし、それではあまりにもあなたが不憫だ。必ず戻ります。その日まで、育んで下さい、生きる希望を。あなたを救いに私が戻ってくるという希望を。その日まで、大きく大きく育んで下さい

親方　痛い、痛い。折れている。肋骨が、大腿骨も、恥骨だって全部だ。全部が折れている。痛い。ぐにゃぐにゃだ。体が。7年間毎日欠かさずストレッチしたみたいに、体がグニャグニャだ。痛い、熱い、痛い

女　痛いの痛いの飛んでけー

親方　な、何を

女　黙れ！ 祈っているのだ！ 私は！ あなたのために！ 痛いの痛いの飛んでけー。痛いの痛いの飛んでいらしゃりますか？ 痛いの痛いの飛んでいかはりましましたわ。痛いの痛いの飛んではりますから。痛いの痛いの飛んでけーっていわはったわ、私はいわはったわ。私な、いわはったんや！ そうや、私、きっとそうなんやわ。な（ドヤ顔である）

親方　痛くない。なんでや。もう痛いのなんて昨日のようや。いや、去年、一昨年、もうあれはずっと彼方の記憶や。わしがのたうちまわっていたんは嘘やったんかな。そんな風にさえ思えてくる。全部、嘘やったんや

女　私は、行くます（ママ）

親方　あんた、何もんや

女　私は、社会にギリギリ適応したい、出来てるかなって境界線の俳優。ウーバーイーツの配達員。私はそういう俳優です

親方　ワシはもう言わないよ。絶対。ウーバーイーツの配達員がまともじ

ゃないなんて。あんたは祈ってくれた。こんなワシのために。ワシは屑じゃった。生まれ変わる前な。今は生まれ変わったワシじゃ。ニューワシじゃ。ワシはパワハラを繰り返す植木屋の親方。植木屋と言えば、パワハラだからね。植木屋の親方のワシは、入社したての４０の小僧に言った。「ウーバーイーツやってるのって、まともなやつじゃない」って。ワシは。過去の屑なワシは痛がりながら思ってた。救急車呼べやって。アスピリン、ありったけよこせ。ロキソニンでもいい。とにかくあるだけ持ってこいやって。せやけど、あんたは、違った。祈ってくれた。こんなワシのために。今までこんなワシのために祈ってくれた者がおったかしら。いや、おらん。あんただけや。あんただけが祈ってくれたんや。こんなワシは、どうしたらええ。どうしたらええんや

女　祈って下さい。誰かのために。一生懸命、一生懸命祈って下さい。少しでも良くなるって、良くなって欲しいって。だれかだれかのために祈って、祈って、そうしたら世の中少しは良くなるんじゃないですかね。私、左翼なんですよ。赤旗配ってたんですよ。でもそれだけじゃダメだと思って、ウーバーやってるんです。生活のために。税金のために。祈りましょう。ウーバーイーツの配達員、コンビニの店員、（ここで好きな飲食チェーンを５つ挙げてください）、世界中のパート、アルバイト、非正規労働者を差別しないそんな世の中がやってくるんじゃないでしょうか。そのためにも、祈って下さい。誰かのために

親方　ワシは、肉体労働者の植木屋の親方。肉体労働者は労働三法を守らないんだ。知らないんだ、労働三法を。読まないんだ、蟹工船を。保守なんだ。植木屋は。こんなワシにも、祈っていいと。祈る資格があると、あんたはそう言うんやな

女　黙れ！ うるさい！ 黙れ！ ……祈れ！ クソが！

親方　痛いの！ 痛いの！ 飛んでけー！

親方、三脚を担いで帰ってゆく。

劇作家現れて、女と視線を交わす。
二人頷きあう（何かを始めようとするが）。

間が悪く男喋り出す。
女の舌打ちが響く。

夜の街は静かだ。

男　Yさんはあの後、隣の町に引っ越していって、N県に進学した。大学ではアメフトの巨大な肉体を持つ白ごはんを何倍も食べる化け物と交際し、オーストラリアにワーホリに行って、日本に帰って来てどこかで幸せに暮らしていて、『リング』は続編でホラーじゃなくてSFになって、パプロフはシニアになって、弟は出来ちゃった結婚して、ローンで家を建てて、父は鬱になって、仕事辞めてお笑い芸人はじめて、母は躁鬱になって、劇作家になった僕はハローワークに恨みを持つようになった。俺は、まだ落ちている。ここだけの話だ

劇作家と女は男を睨んでいたが気を取り直して。

さて、劇作家と女の番である。
全ては順番通り。

劇作家　右胸が痛むことがある。午前2時45分。中学生がポエムを綴り出す時間。私は、戯曲を書いている。20年前、私は彼女に出会った。駅前の「からふねや」で私は戯曲を書いている。当時立ち上げたばかりの劇団のための戯曲だ。内容は覚えていないが、キャメルマイルドの吸い殻が山のように積み上がっていく。雨、雨が降っていた。午前2時45分。女が落ちてきた

女　すみません、前いいですか？

劇作家　前？　前とはどういうことだろう。前？

女　すみません。ほんと、ちょっと疲れてて

劇作家　そういうと彼女は私の向かいの椅子にカバンをおいて、私の膝に落

ちてきた。前？ 前？ これはむしろ上では？

女　すみませーん（店員を呼ぶ）えっと、このジャンボチョコレートパフェお願いします。（以下は劇作家へ）すみません、ほんと。すぐ出て行くんで。すみません

劇作家　いや、その、そこの

女　（遮って）今は、今はもう少しだけこのままでいさせてくれない？ 嫌なことがあって、酔っ払っちゃったの（タバコに火をつける）

劇作家　口が臭かった。生き物の匂いじゃない。これは、養命酒？ 薬用養命酒の匂いか？ 嫌なことがあった時に飲む酒じゃないはずだ。養命酒の匂いの向こうにもう少し根本的な匂いが……

女　ごめんね、私、口臭いでしょ？ 私口（クチ）クサなの。口クサさんて呼んでもいいのよ。ふふふ。私ね、口が臭い女なのよ。さっきくさや食べたの

劇作家　いえ、臭くないです。それよりどいてもらえないですか？

女　何よ！ ばか！ くさいわよ！（僕の右胸を叩いて、去る）

劇作家　痛い。すごく痛い……ぐは（吐血）肋骨が全部折れていた

女　痛いの痛いの飛んでけー！ 痛いの痛いの飛んでけー！

男は劇作家と女とのやりとりに見入っている。

弟子が闇から現れて話しだす。

弟子　十年ほど前のことだったと思います。僕、その頃なんか京都の劇団で演劇？ してて。劇作家やってました。そんで、えっと、打ち上げ？ 公演終わった後の飲み会の時にそん時気になってた子の横にしれっと席取れてて、宴もたけなわですねってくらいの時に彼女の左耳に

弟子、女に（あるいは女、弟子の側へ）

「ちょっとばっくれない？」って囁いてみたんすよ。そんだら彼女が僕の左耳に

女　ええよ

弟子　ほんでトイレ行くふりして、劇場近くの居酒屋を抜け出したんすよ。

んでも夜中前だし、店とかもうやってないし、どうする？ってなって、とにかく夜中の北大路通歩く感じになって、なんか喋ったりしながらずっと歩いたな。二人で。千本通りくらいまできてちょっと疲れたねつって、午後の紅茶ミルクティー買って小さい公園のベンチで飲みました。甘かったな。一本の午後の紅茶ミルクティー

女　私、なんか高校ん時に廊下歩いてたらさ

弟子　うん

女　急に色々嫌んなって、オラって足振り上げたんよね。そしたら上履きがすぽって抜けてさ、天井に刺さったことある

弟子　なにそれ、こわ

女　ほんとほんと、上履きのつま先部分が天井に刺さってた。そんで思ったなあ、学校って案外脆い素材でできてんねんなって。それから生きるの楽になった気がする

弟子　……

女　なあ、キスする？

弟子　ええよ

時折通る車の音だけが聞こえる。
静かな夜。

女　え？　泣いてるん？　大丈夫？

弟子　そのキスで僕の前歯は全部折れた。彼女は全体的にフィジカルが強かった。涙が頬を伝う

女　痛いの痛いの飛んでけー！　痛いの痛いの飛んでけー！　（走り去る）

劇作家　三億年くらい前のことだったと思う。その頃私はまだいたいけな劇作家で、怖いとか、嫌だなとかそんなことに人生のほとんどを振り回されていた。今でもそうか、今でもそうかもしれない。怖いものは嫌だし、嫌なものは避けたい。だから本当はここだけの話だけれど、仕事はしたくない。あの頃私が劇作家だった頃、私は彼女と暮らしていた

弟子　今週の日曜の午後って空いてるよね

劇作家　（ベランダでタバコを吸っている）え？
弟子　みたい映画があるんだけど、いかない？
劇作家　映画？　いいよ
弟子　あのさ、興味ないよね。だいたいのことに興味ない
劇作家　怒ってるの？
弟子　怒ってます。私、怒っていますよ
劇作家　なんで？　怒るの？
弟子　興味ないから。私に
劇作家　あるよ。興味あるじゃん
弟子　そうか。それならよかったですけど
劇作家　その日曜日、バイト終わりに河原町の映画館で彼女を私は待っていた。約束の時間になっても彼女は現れず、そのままかれこれ三億年私は彼女を待っています
女　痛いの痛いの飛んでけー！　痛いの痛いの飛んでけー！　（走り去る）

男、闇に吸い込まれるように話しだす。

男　俺、落ちる前。一億五千年くらい前のことだと思うんですけど、俺、小指くらいの大きさのニットキャップが欲しくて、寺町通のミリタリーショップヤマモトに行った。一人だったか二人だったか、五人、六人かもしれないし、友達かその辺の人か両親、それかまだ何者でもないような大学生と連れ立って行ったかもしれないし、そうじゃなかったかもしれないんだけど、小指くらいの大きさのニットキャップ売ってなくって。どこにも。西友にも高島屋まで回ったのに売ってなくって、はあ？　どこにも売ってねえじゃん！　小指大のニットキャップ！　ってなって、でも何にも買わないで帰るのも癪だからさ、寺町と河原町の間にあるラブホにでも行ってみるかってなったんよね。んで、みんなで十五人くらいで行きました。その途中、ラブホの入り口に干してある分厚い昆布をくぐる時に、あ、見つけた。俺、あなたを見つけた
劇作家　そっか、見られてたのか。私、あなたにみつけられてた。あの頃の

私は確かもう劇作家じゃなかったんじゃない？

男　映画館の前で寝転んでたあなたは紫色だった。劇作家

弟子　思い出した。私、彼女を待ってたのを

劇作家　僕は、ティッシュでつまんで持ち上げた。劇作家を

男　やあ

弟子　やあ、何してるん？

劇作家　待ってるの。ずっと待ってるってことは興味あるよね

男　ないんじゃない？ 探すっしょ。興味あれば

弟子　ムカついたので、ちょっと揺れた

劇作家　紫の劇作家が赤錆っぽく色を変え、揺れた。当然劇作家は臭いわけだ。アスファルトに思いっきり叩きつけちゃった

男　全部折れた。私たちの全部は折れた

弟子　痛がる金玉の仕組み。末梢神経にある侵害受信機が強い刺激を感知する。猛スピードで電気信号が走る。脊髄を通って脳へ！ 伝令を受けた脳は刺激を受けた下請けの部位、今は金玉の痛みの質と程度を一瞬で計算したい。けれど衝撃自体は精巣動脈神経を通して腹部へも伝達されている。そのあまりに大きな衝撃の強さに司令塔たる脳は大混乱である。もう今や具体的にどの部位が痛んでいるのか全く把握できずやたら滅法に電気伝令を飛ばす。全身悶絶タイムが始まる

三人　（三人は闇に溶けて一つになってしまっている）どこで何を間違えたのか、私はどうなればよかったのか。長い時間が経って、今だにわからない。これから植木の仕事に行くことになっている。重ねて言うが仕事はしたくない。小指大のニットキャップが見つかるのは２０世紀も半ばになってからだった。それに僕は折れた前歯を全部入れて実家の屋根に投げた。丈夫な前歯が生えますように。食べてあげようか、君の想像力。いいよ。もうなんでもいい。なんもかも関係ない。ただ、落ちてゆく。いただきます。絶賛悶絶中

犬　（いつの間にか見ている）あの、あれだね、悲しい話だったね。怖いって言うか。悲しい話だったよ。あの、どっちかと言うとね（屁をこく）

パブロフは男に向かってぶつかっていく。
男を突き飛ばし、屁をこいて散歩紐を渡す（寂しかったのね）。
ボストンテリアは吠えるより屁をこく犬である。
男は犬と遊んでいる。
犬と遊ぶのは楽しい。

男　パブロフ。俺、まだ落ちてるよね？　ちゃんと落ちてるよね？（不安そうに）
犬　ぶ（返事の代わりに屁をこく。くっさいやつ）

朝が来る。
毎日毎日懲りもせず。
植木屋の朝は早い。

弟子　おはようございまーす
親方　てめえ、トラック汚ねえじゃねえか、なんで拭いてねえんだよ。ことここと、ここ……
弟子　親方あ。伸びてますね。（親方を丁寧に剪定する）ここと、ここと、ここと、ここと、ここと、ここと、ここと、ここと、ここと、ここ。スッキリしましたね
親方　おおーい。これじゃあ俺もう植木屋できねえな。子供も嫁もいるのに生活できねえな。スッキリしたけどよ。スッキリはしたけどよ
弟子　演劇でよかったな！　演劇でよかったなって言ってんだよ。ヘラヘラしてんじゃねえよ。俺が演劇でよかったなって言ってんだよ

親方はバラバラに剪定されてスッキリする。
弟子の技術は親方から受け継がれてゆく。

女走ってやってくる。

女　遅くなりましたー（息を弾ませている）

劇作家　あ、ウグイスでしょうか？
女　そうですね。ほーほけきょってね。言いますでしょ？ ウグイス
劇作家　ほーほけきょって、いいますね
女　ホトトギスはどうでしょうか？
劇作家　キョキョキョキョ。じゃないでしょうか？
女　キョキョキョキョ。ははははよかった
劇作家　え？
女　楽しそうで
劇作家　ええ、わたし思い切って外に出てよかった、そう思います。思っています。ありがとう。連れてきてくださって
女　いえ
劇作家　ウグイス。ホトトギス。……クリトリスは？ クリトリスはどうかしら？ クリトリスはどう鳴くのでしょう？
女　（きっぱりと言い聞かせる）鳴かんのんよ。クリトリスは。人体やけえの、クリトリスは。ほやけえ、鳴かんのんよ。人体は、鳴かんのんよ。ちーちゃんはわからんこといっぱいあるけえの、ちょっとずつわかっていったらええ。のう、鳴かんもんもあるんじゃけえ、そう覚えたらええんよ。ちーちゃん
劇作家　クリトリスは鳴かない……
女　ほうよ。鳴かんのんよ。なきゃあせんのよ、人体じゃからのう。人体は、鳴かんのんよ。なきゃあせんのんよ

女　その日、父は家を出て行った
劇作家　ちーちゃん、お父さんは若い女の人のところに行ったのよ。ちーちゃんは大人になっても若い女の人のところに行くような人と一緒になっちゃいけないよ
女　私は知っていた。父は若い女の人のところに行ったのでないということを。父はいつも憂いていた。この国の行く末を、民草のことを。彼らには本当のことを知る必要がある。父には信念があった
劇作家　天竺に行くよ。父さんは、とにかく、天竺にね
女　私は、まだ幼く、父がいなくなるということがどういうことなのか

わからなかった。ただ悲しくて、悲しくて父の背が見えなくなるまで必死で追いかけた。父の背が街灯に照らされて、見えなくなるまで。気づけば私は見知らぬ町にいた。ちょうど夕飯？ 何処かからカレーの匂いがしたのを覚えている。お腹がなって。不安だ。私は不安を覚えた

劇作家　どうしたの？ 迷子になったのかい？

女　知らないおじさんだった。知らないおじさんに声をかけられたと私は思った。知らないおじさんだと。これは世に言う知らないおじさんだ

劇作家　でも、もう知り合ったわけだから知らないおじさんじゃないよ。元、知らないおじさんだよ。今は知ってるおじさんだろう？

女　確かに、そうかもしれない。元、知らないおじさんはもう知ってるおじさんかもしれない

劇作家　知らないおじさんはね、迷子の子供にお菓子やおもちゃをあげたりするもんさ。でもおじさんは違うよ。知ってるおじさんだからね。知ってるおじさんは子供に何か物を与えたり、チラつかせたりして連れて行こうとなんかしないよ。おじさんはね、そんなことはしない。そんな浅ましい真似はしないんだ。そう誓ったんだよ

女　誓ったおじさんを私は初めて見た。その後何度か誓ったおじさんを見ることになるが、おじさんたちはその誓いを破ることも知った。おじさんは意志が薄弱なのだと私は後に知る。私は誓った。おじさんになんかならないと。私は後に誓ったちーちゃんになる。そう誓ったちーちゃんだった

劇作家　ここはね、君の知らない町、天竺だよ

女　天竺だった

劇作家　どうして天竺まで来たんだい？ おじさんに聞かせてごらん？ ご両親は？

女　父が出て行ったこと。母が父を疑っていること。父を追いかけてここまで来たこと。私は泣きながら知ってるおじさんに語った

劇作家　お父さんを探しているんだね

女　私はそうかもしれないし、そうじゃないかもしれないと思ったが、おじさんにはそうだと言った

劇作家　じゃあ、これを君にあげるね。そう言うと私は泣きじゃくるその子にくしゃくしゃになったスーパーのレシートをあげたのさ

女　知っているおじさんのポケットから出て来たちょっと匂うスーパーのレシートをもらった私は正直戸惑っていた。こんなものを渡されても。という気持ち。その気持ちがこう言わせていた。こんなものもらっても

劇作家　子供に馬鹿にされた。私は怒りよりも先に情けなさで胸がいっぱいになった。良かれと思って迷子らしき子供に声をかけ、レシートをあげたのに。そう言った。一言一句間違いなくそう言った

女　ゴミじゃないか！　私は声を荒げていた。だいたい誓いも破られているし、ゴミ渡してくるし、私は子供かもしれないが一人の人間なのだ。そう考えた刹那、それは自我の目覚めですか？　近代的自我を得た

劇作家　そうだよ。今、君は大人への階段を登ったんだよ。そのレシートは、ゴミじゃない。裏を見てごらん。そうおじさんは言うと走り去って行った。その必死に走る様は滑稽だった。随分と走っていなかったと見えて、時おり右のふくらはぎを痛めてしまっている。いたたたた。そう言いながらおじさんは闇に溶けていった。遠く、痛がるおじさんの声が聞こえた。そんな気がした

女　痛いの痛いの飛んでけー。痛いの痛いの飛んでけー。夕闇の街にこだました私の声。私の手にはくしゃくしゃのレシートがあった。レシートの裏。金玉袋みたいにクシャクシャのレシートを伸ばす。伸ばしても伸ばしても広がる無限の宇宙。ビックバン。シワシワのくしゃくしゃの皺を伸ばすととんでもないことになると私は知る。金玉袋の裏をみる。そこにはびっしりと何かが書かれていたが、町は暗闇に包まれていて、何も読めなかった。その時だった

劇作家　ちーちゃん

女　父だった。父が立っていた。ボロボロの背広を着て、心配そうに。いつもの優しい父がそこにはいた。お父さん

劇作家　ちーちゃん、父さんな、ダメだったよ。天竺に来たらなんとかなるって、世の中良くなるって思ってたけどダメだった。ごめんな、ちーちゃん。頑張ったんだけどな、父さん。頑張りが足りなかったの

かなあ。新自由主義かなあ。自己責任かな。私は知っているそれっぽい言葉を使ってみた。父の威厳。家父長制が私をそそのかしていた。私は娘にちょっとお父さん賢いなって思って欲しくて家父長制にそそのかされたんだ。なんてことだ！ 私は左翼！ またはリベラルなはずだ。怒りに震えた。ブルブル

女　帰ろう。お父さん。そう言うと、ちーちゃんは小さい右手を差し出した。ちーちゃんは優しさを知っているのだった。ちーちゃんはいつだって優しい。

劇作家　私はいつもみたいに、手を繋ぎ家路についた。どこかからカレーの匂いがして、懐かしいなあ、母さんのカレー。私はそう呟いた

女　そうやね。今日もカレーやといいね。シチューやったらぶーや！ お母さん待ってるよ！ えへへ。私はエへへと笑える年齢だった。その時、その日、私はエへへと笑えた。父と握りあった手のひらにあのレシートがあることに気づいたのは、エへへの2個目の「へ」の時だった。あれ、これ

劇作家　これ。それは経典だった。私が天竺に求めたもの。民草を救うもの。真実。未来。より良い社会。それ、それが匂うレシートに書いてあった。多分。暗くて字が読めなかった。その時は、それで私は読むのを諦めた。多分資本論か何かだと確信していた

女　私はそもそも字が読めなかった。幼かったから。字を読むにはまだ私は幼すぎた

劇作家　その後、私たちは幸せに暮らした。ローンは残っていたが、いろいろなローンが。それをコツコツ返しながら、幸せに暮らした。私の小さなちーちゃんはいつしか大人になって、今でも盆と暮れになると小さな孫娘を連れて帰ってくる。そのためのローンだったんだなあと縁側でお茶を飲みながら、母さんと笑った

女　匂うレシートの経典にはありがたいことが書いてあったけれど、民草にはちょっと難しかった。ストーリーが難しかったとか、アートだったとか、映像はすごいけど好きじゃない、性的なモチーフが多かった、など、とにかく評価が割れる作品だった。概ねなんか難しいということで賞だけはいただきました。賞金のほとんどはローンに消えた。賞というものは三つのテーマ。男性の偏執的な性欲、父

親探し、母親批判、郊外の機能不全家族に与えられる精神分析だ。
私は演劇をしている！ 私は演劇をしている！ 身も蓋も知れ！ 身も蓋も知れ！ 痴れ者どもが！

劇作家　怖いよ

女　あのう

劇作家　はい

女　なんか、戦争とかあるじゃないですか？ 世界に

劇作家　うん

女　劇作家先生のあなたに聞きたいんですが。書かれたセリフをせっせと覚えて、演出に言われたことに元気よく「はい」って返事することを期待される俳優として聞きたいんですが

劇作家　そういう言い方されるとちょっと

女　あ、いえ、搾取とかそういう風には全然。職能？ 役割ですもんね。対等対等

劇作家　うん、そうね

女　演劇なんてやってていいんすかね？ つうか、なんつうか

劇作家　悩んでるんだね。わかるよ。悲惨なこといっぱいあるもんね。世の中

女　ちょっと違う……かな。なんでもわかったような口利きますよね

劇作家　え

女　私、この劇団辞めます。子供達に想像力の素晴らしさ！ 言葉の美しさ。綺麗な言葉を教えて世界を浄化します。そういう活動します。近代的な自我に目覚めているので。一市民として、俳優の経験を生かして、世の中の浄化に一役買って行きます

劇作家　お、おお

女　あなたはあなたで自分が認められないとか、社会がクソだとかそういう劇作に勤しんでください！ デモとか行けばいいと思います！ ガンバ！ （鼻歌交じりで走り去る）

劇作家　怒られた、のか……俺だって、俺だって（小走りで去れ）

女、劇作家、闇に溶けていく。

男はパブロフの引っ張る方へ滑り落ちている。

男　4月3日、午前3時14分、早朝。空を見上げると、巨大な犬の金玉袋の影がある。江戸川の土手から見える巨大な丸い影は左右に大きく揺れている。不安だ。スカイツリーに刺さるんじゃないか。刺さらないんじゃないか。いや、刺さるんじゃないか。ギリギリのところで揺れる巨大な犬の大金玉袋。落ちるなよ！　犬の大金玉袋！

男、俳優、パブロフ。
虫取り網で何かを集め出す。

「痛み」だ。
深海に降り積もるプランクトンの死骸。
ここには、光も、音も。
「痛み」が落ちてくる。

俳優　来たよーそっち行ったー
男　すみません。目が見えなくて
犬　クスリクスリクスリ切れてる
男　すみませんレッドピル飲みますー。レッドブルで
俳優　はーい
男　ほい。ほい
犬　ほい。ほい
俳優　はい。お疲れ様ー。休憩しようか

座って。

俳優　だいぶ慣れたね。上手上手
男　ありがとうございます
俳優　目が見えない方が見えるんだね。盲点だったよ
男　いやあ、やっと天職見つけたなあって感じっすね。落ちてくるものはなんぼでも見えます

犬　あ、うんこしたくなってきちゃった

俳優　昔に比べるとだいぶ減っちゃってさ、その分休憩取れるから昔よりは楽だけど。それでも、見つけるの上手だよ、君

男　ありがとうございます。今ってそんなに「痛み」ないんですね

俳優　うん。マツキヨとかさ、ドラッグストア増えたじゃない。郊外行けばコンビニより多いってね。痛くなったらすぐロキソニン、アスピリン、イブクイックよりどりみどりだもんね。現代人は祈らなくなっちゃって久しいよ。由々しき事態よ。これは。今集めたのだってさ、田舎からでしょ？ 多分。知らんけど

男　適当っすね（笑う）

俳優　あと、みんな我慢しちゃうもんね。痛くても

男　ああ。そうっすね。痛がるとね、アピールしてるみたいで

俳優　今日何個になった？

男　はい。（数える）１５個っすね

俳優　足りねよな？（男に）……しょうがねえな

男　ええ。まあ、でもまたですか？

俳優　うん。でもやるべきことはやらないと。ほら、俺社会人だから（笑い）

男　はははは（笑う）

俳優　よし

と、俳優気合を入れて立ち上がります。

「は！」と息を吐き出して自分を鞭打ち始めました。

俳優　痛え！ うおお！ 痛え！ 折れた！ 折れた！ 折れてない？ ここ折れたよね？ 痛え！ 血だ！ 血が出た！ 痛え！ （続ける）

男　痛いの痛いの飛んでけー！ 痛いの痛いの飛んでけー！ ほい！ （虫取り網で捕まえる）出てます。出てます

俳優　痛え！ 痛い！ 痛い！ 小指！ 小指いいい！ 痛え！ 血が出た！ 血が流れてる！ 流れすぎてる！ 痛い！ 痛いよ！ 助けてくれ！ 助けてくれ！

男　はい！ 痛いの痛いの飛んでけー！ 痛いの痛いの飛んでけー！ ほ

い！ ほい！ （捕まえる）

パブロフは楽しそうに「痛み」を追いかけている。

「痛み」は犬が喜びそうなモノである。

俳優　うおおお！ 痛い！ 血が流れて、滝の様に流れる俺の血！ それは血流！ 生きている証！ いたあああい！ 痛い！ ジンとくる痛み！ 熱くなる痛み！ キーンとくる痛み！ 流れる俺の血！ こんなにも俺の中には血が流れていたんだ！ 俺は！ ！ ！ 血でできている！ 俺の血は何色だ！

男　すみません！ 目が見えません！

俳優　見えねえ！ 何も見えねえ！ 血を流しすぎた！ 血を流しすぎて何も見えねえんだ！ 痛い！ おかああさあああん！ 痛いよおお！ 痛え！ 痛えよおお！

男　はい！ 痛いの飛んでけー！ 痛いの痛いの飛んでけー！ ほい！ ほい！ ほい！ （捕まえる）

俳優　痛すぎて気が遠くなる。俺は、一体、何を……仕事だ！ これは労働なんだ！ 痛い！ 痛い！ いてええ！ 見えねえ！ 助けてください！ 助けてください！

男　はい！ 痛いの痛いの飛んでけー！ 痛いの痛いの飛んでけー！ ほい！ ほい！ ほい！ （捕まえる）

俳優　精神的なやつ！ 精神的なやついくぞお！

男　はい！ 無能！ 穀潰し！ 弱者男性！ クソやろう！ 嘘つき！ 偽善者！ ファシスト！ レイシスト！

俳優　痛え！ 痛え！ 心が！ 砕け散る！

男　はあ？ 鏡見てから出直してきなよ！ 誰があんたみたいなやつのこと本気で好きになるわけ！ きしょ

俳優　うおおおお！ 大好きだったのに！ 愛だと思ってたのにいい！ 痛いよ！

男　痛いの痛いの飛んでけー！ 痛いの痛いの飛んでけー！ ほい！ ほい！ ほい！ （捕まえる）

パブロフは遊びあきて寝ている。
犬は1日のほとんどを寝て過ごす。

俳優　浮気したことがあります！
男　痛いの痛いの飛んでけー！
俳優　殺してくれ！　殺してくれ！　俺を殺してくれ！　痛いよ！　痛いんだよ！　うおおお！　そんな目で優しい目で見ないでくれえ！
男　痛いの痛いの飛んでけー！
俳優　ガキの頃駄菓子屋で練り消しを万引き続き倍旧のご厚情を賜りたく切にお願い申し上げます！
男　痛いの飛んでけー！　ちょっと！
俳優　俺は本当は
男　もういいです！　もういいです！
俳優　……
男　もう大丈夫です
俳優　みっともないところを
男　いっぱい落ちてきました。ほら
俳優　どうやった？
男　途中から気持ちよくなっちゃってたんで、後半から出てないです（笑う）
俳優　止めてよ（笑う）
男　殺せ！　とかもう趣旨違ってきちゃってますよ。へへへ
俳優　へへへじゃないよ。痛いんだから。痛くなくなるけど。痛いのよ
男　でも、すごいっすよ。毎日ノルマ足りないからって、自分を痛めて
俳優　大人だからね。社会人社会人よ
男　誰も見てないしいいじゃないっすか
俳優　うん。でも足りないとちゃんと循環、循環しないと、ほら大変なことになるからさ。目覚めちゃう。大変なことになったら大変じゃん。大変なことにならなかったら大変じゃないけどさ。俺、大変なことになって欲しくねえもん。みんな目覚めないほうがいいもんな。大変なことにならないなら俺がちょっと大変でも大変なことにならな

いようにさ、足らして、循環、サイクルサイクル

男　俺、どうなっちゃってもいいって思ってすけどね。関係ないっすもん。俺何とも繋がっていない。パブロフといれればいいっていうか

俳優　うん。まあ。でもいいじゃん。人知れず知らない誰かの為に血を流して、祈って、金もらって、ビール飲んで寝る！　肉体労働の中の肉体労働！　純粋肉体労働者！　それが俺！

男　セロトニン多いんすかね（笑う）

俳優　お？　バカにしたなあ！

男　してねえっす。羨ましいっす。ちゃんとしてて。俺もちゃんとしたかったな。本当は。ちゃんとできたらよかったんすけどね

俳優　あはははは……（唐突に）足りねえで困るのお前だろ？

犬　ねえ。終わった？

俳優　飽きちゃったかあ。今日はもう終わりだよー。あとやっとくから、上がっていいよ

男　アザーす。行こうか（パブロフへ）

犬　うん！

犬と男は江戸川沿いの土手をゆく。
川向うには巨大な犬の金玉袋が浮かんでいる。
と、スカイツリー。

犬　あれ、刺さると痛いだろうね

男　そうか。そうだね。刺さったら痛いだろうな。気がつかなかった

犬　君はパンツ履いてるからさ

男　そうか、パブロフは履いてないもんね。履きたい？　パンツ

犬　いや、いいかな。パンツは履きたくないよ。オシッコ蒸れそう

男　そうだね

犬　あのさ

男　ん？

犬　金玉袋さ、僕あって良かったと思ってるよ

男　ぶつけたり、何かに刺さったりしない？

犬　こういうこともあるし、そういう時は痛いけどさ。キャンっていう

よ。そん時はさ

男　言うね。キャンて

犬　キャンて言う。僕は。君は？

男　僕？　僕はなんて言うかな。痛い！　かな

犬　もしね、もし僕が去勢されてたらさ、キャンて言うかなあ。言わないと思うんだ。だからさ、金玉袋あってよかった。感謝してるよ。ありがとう。金玉袋あってくれて

男　うん

犬　巨大な鉄塔と巨大な金玉袋ってさ、メタファっぽいよね。男性性のメタファ。知ってるよ。鉄塔は男根でしょ？

男　そうだね

犬　違うよね。棒状の物はさ、おもちゃさ。棒状のものは噛むものさ。男根を噛むのは阿部定さ

男　そうだね……(突然不安に駆られて)俺、まだ落ちてるよね？　きちんと立派に落ちていってるよね？　落ちてるんだよね？

犬　クシュン（くしゃみ）だから！　大丈夫だよ。なんとかなるよ。僕がいるよ

男　ありがとう（抱きしめる）。あったけえ

犬　犬やさかい。生きてるさかい（抱きしめられたのがうざったい）

パブロフは走り出す。
引っ張られて男も走る。

犬　(振り向いて)帰ろうか

男　うん、でも

犬　(後ろ足に力を込めて）グッ。トン、ターン！

男　跳んだ？　跳んでいる？　（焦って）落ちないと！　早く！　落ちないとダメなんだ。落ちていないとダメなんだよ！　俺は！　困るんだ！

高く。高く。
男は散歩紐にしがみついている。

犬　やあ
大金玉　来たね
犬　うん。来た
大金玉　帰るのかい？
犬　うん
大金玉　そうか

パブロフは前足を伸ばして。

犬　冷やすよ。金玉袋（肉球でピタピタする。肉球はひんやりしている）
大金玉　ううー。ひんやりする。肉球がひんやりして。寒い！（ブルブルっと大きく震える）さむーい！

「金たまがちぢみあがる」

大金玉　（縮みながら）縮む！ 縮む！ 大金玉が縮むぞい！ ぐいぐい縮むぞい！ ブルブルっと縮むぞい！ 冷たい、寒いは縮むぞい。天高く縮むぞい！ さあ、縮みきって、もう無いんじゃ無い？ 金玉ないんじゃ無い？ メスじゃない？ ってくらい縮むぞい！ そら！（ブルブルっと大きくやる）
犬　今だ！ 手を離せ！ ポン！
男　ポン！

舞台のせり上がりの最後に飛び跳ねるように。

上空にいる。

犬　見て！ 夜明けだよ。太陽だよ！ 丸くて、デカくて、あったかい！
男　見える！ 見えてる！ でっけえ金玉だ！（2人大笑いする）
犬　君は落ちている。立派に落ちてるさ。上に！ 落ちている！ 上にだって落ちてゆける。帰るんだ。痛みを抱えて。それだけあれば充分さ。帰って、呼ぶんだ。僕の名を！ 僕の名を呼んでくれ！ 散歩に

男　行こう！ 見たくても、見たくなくたって、見るべきものは見よ！ 例えその眼を焼かれても。見るべきは見よ！ さらば。犬の大金玉袋。ありがとう。犬の大金玉袋！ 僕の名を叫べ！ 落ちる君よ！

犬　パブロフ！ パソコンを閉じて、散歩に行こう！ パブロフ！ いっぱい遊ぼう！ パブロフ！ 一緒に寝よう！ パブロフ！ 俺は、上に上に落ちて！ パブロフのいる底の底に帰るんだ！ パブロフ！ パブロフ！ 君はあったかい！ あの太陽のあったかい金玉へ！ 俺は落ちる！ パブロフの金玉めがけて俺は落ちていく！

（大きく）ワン！

日が昇る。朝日が世界を照らす。

女、自転車で江戸川の土手を爆走している。

女　（発声練習のつもりだろう。「うおー」「ボエー」などの奇声を発していたが）急停止！ ぎゃっ！ （ブレーキの音らしい）

上がる砂埃の中、女が立つ。

女からは湯気も立つ。

女　温まっている！ 細工は流々仕上げを御覧じろ！ 私の番だ！ 私の番だと言っている！

朝日に向かって仁王立つ女。

女　（大上段からの大台詞）金玉袋を見るものはまた金玉袋に見られている！ （決まった！）

日の光に照らされて、全てのものが温まる。

全てが、温まる！

と、巨大な犬の鳴き声が響く。

「キャン！」（痛い！）

おわり